巻頭言

江戸時代に持続可能社会の姿を探る

物質工学工業技術研究所　小野　修一郎

以前の巻頭言で、東大の吉田邦夫教授が持続的発展について書いておられたが、私も全く同感である。人類がこのままの消費型物質文明を続けたら、後５０年で回復不能の破局になると予想されている。もっと早く、２０１０年頃までには、食糧、エネルギー、水等の需給が逼迫し、「持続不可能性」が現実の問題になるだろう。「持続可能性」とは「閉鎖空間の中の人間社会をいかに安定に持続させるか」と言う課題である。地球は閉鎖空間であり、５７億の人間が閉じこめられている。

昨年ヨーロッパであった国際会議で、「持続可能性、SUSTAINABILITY」、について次のような話をした。「日本人は、およそ３００年前、持続可能性の実験をしたことがあり、ある意味では成功した経験を持つ。」　勿論、江戸時代のことを言っている。当時幕府は鎖国政策により、日本を閉鎖空間にした。幕府が命令したからと言って鎖国ができるわけではないが、程良い広さの海で隣国から隔てられた地理的特殊性が実質的に日本を閉鎖空間にしたのである。当時の日本の人口はおよそ２０００万人（？）、このような大国が閉鎖空間を形成できた例はあまり無いと思う。その中で幕府の基本政策は当然幕藩体制の維持であったが、結果的にそれは持続可能性を追求したことになった。２５０年も平和な時代が続いたことは、幕府の政策は成功したことになる。

では幕府は持続可能性のためにどんな政策をとったのだろうか。２つの例で説明する。一つは、「たわけ」と言う言葉である。「愚か」と言う意味だが、語源は「田分け」と言うことを知っている人は少ないのではないか。田分けとは農家における田畑の分割相続のことである。閉鎖空間の中の限りある田畑を分割相続したら、２、３代で農村社会は崩壊する。従って社会の持続可能性のために田分けは社会的タブーになる。ことの善悪、好き嫌いは別にして、持続可能性のためにはどうしても必要な社会的規制があると言うことである。もう一つは、江戸中期に花咲いた「粋（いき）」な町人文化である。粋とは何かと聞かれて、粋には二つの条件があると答える。「貧乏人も金持ちも同じことをする。」「金持ちは貧乏人を刺激しない程度に目立たず贅沢をする」。「木綿の着物の裏地を絹にする」類の話である。「文化」とは広く「人生の楽しみ方」と訳して欲しい。粋な文化の本質は、「持続可能社会の文化の主流は勝者のみのものであってはならず、敗者に配慮されなければならない、つまり大衆文化でなければならない。」ことである。一方、持続可能性のためには、社会の活力を維持するために、競争原理が必要である。結果平等主義の社会がどうなったかはソ連の結末を見れば分かる。たとえ封建時代と言えども、商人が金持ちになることを押さえることはできない。競争は勝者と敗者を生み出す。粋な文化は、競争原理と大衆文化の一つの妥協点と見ることもできる。持続可能社会のための文化なのである。

２１世紀に実現する未来型持続可能社会はどんな姿をしているのだろう。